「私たち」を問い直す
フューチャー・デザインの哲学への一構想

宮田晃碩

東京大学大学院 総合文化研究科 超域文化科学専攻
比較文学比較文化コース　博士課程

総合地球環境学研究所　共同研究員

専門・問題関心

- 哲学
  - 特に マルティン・ハイデガー、和辻哲郎、ハンナ・アーレントを読みながら
  - テーマ：「他人の語りを理解するとはどういうことか」
- 実践／超学際研究（Transdisciplinary research）
  - 多文化共生・統合人間学プログラム（IHS）
  - 総合地球環境学研究所
    （⇒ フューチャー・デザインに関わる ⇒ 2/4ワークショップ@地球研）
  - 中学・高校等での「哲学対話」／国語科教員

「フューチャー・デザイン」への哲学的考察

【問い】　フューチャー・デザインの意義はどう捉えられるか？
どのような点を重視して展開すべきだと考えられるか？

【分析のための観点】　現象学における**「将来」**と**「語り」**の概念
【分析の対象】　フューチャー・デザインの実践における「将来」の働き

⇩

【答え】
- 語り／語り合いの時間的なモードを変容すること
- 「私たち」についての理解を変容すること

問いの背景・動機（1）

フューチャー・デザインに関して

- 実際に将来世代の人々と対話できるわけではない
  ⇒　責任・倫理の問題
  ……これは欠点・限界なのか？
  　　むしろ積極的に捉えることができないか？
- どのような将来像を描くべきなのか？
  ⇒　将来像の妥当性・倫理の問題
  ……あらかじめ決まった答えを押し付ける方法であってはならない
  　　当事者の有する知や関心を活かす方法であるべきだろう

世代間倫理に関する4つの問題

(1)　将来の主体の非（未）存在
(2)　将来の不可知性
(3)　現在と将来の非対称性
(4)　世界の構成に関する問題

（Fritsch 2018）

問いの背景・動機（2）

哲学の側から

- 「将来」への関わり方は哲学の根本的な問題
  ……将来を単に「現在」の延長として捉えるのをやめよう、という動き
  Cf. 「現前の形而上学」への批判（J. デリダ）
- 哲学の「実践」が徐々に試みられている
  ……日常的に自明とされていることを「問う」という態度
  Ex. P4C, 哲学対話　⇒　さらなる展開？

⇒ 哲学の議論の紹介と自分の研究からの応答

話の流れ

【問い】　フューチャー・デザインの意義はどう捉えられるか？
どのような点を重視して展開すべきだと考えられるか？

【分析のための観点】　現象学における**「将来」**と**「語り」**の概念

【分析の対象】　フューチャー・デザインの実践における「将来」の働き

【答え】
- 語り／語り合いの時間的なモードを変容すること
- 「私たち」についての理解を変容すること

① ハイデガー『存在と時間』（1927）における「時間性」の議論

② 「探究の語り」についての議論

論文（Nakagawa et al. 2017）を参照しつつ考察

現象学（哲学）の方法

- 日常的に妥当している理解の枠組みをいったん停止する
- 自分自身の経験を出発点とする

⇒　お仕着せの言葉に抵抗しながら、経験そのものを言葉にもたらす

- 利点？　⇒　“確実性” への問いに答える（哲学的関心）
  当事者自身の経験を尊重する（実践的関心）
  言葉によるアプローチ　→　人間の理解・行動に直接干渉する

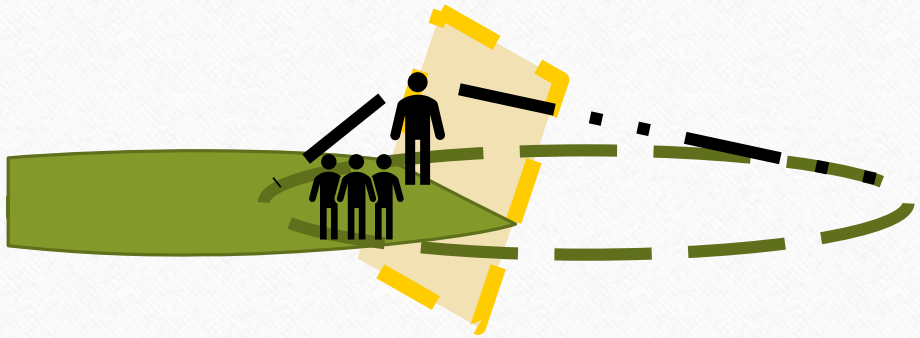
ハイデガー『存在と時間』から (1/3)
日常的な時間性における「将来」

- 日常的な経験は「～するため」という連関から成る
  - 我々は身の回りのものをまずもって「対象」ではなく、意味のある「道具」として見ている
  - ものがどのように現れてくるかは、自分の「関心」によって決まってくる
    Ex. 金槌→釘を打つため→家の建付けのため→身を守るため
  - けれども自分がどのような「関心」を持つかは、普段 “常識まかせ” になっている
- 日常的な時間性は**現在の「人々」の関心によって**秩序付けられる
  - 自分の生活している世界は「～するため」という連関から成っており、
    この「～するため」という連関のなかで時間は計算されることになる
  - 「将来」は、現在の（誰のものとも分からない）関心が実現するか否か、という観点から理解される
    …… **非本来的な「将来」** ＝「予期」

ハイデガー『存在と時間』から (2/3)
本来的な時間性における「将来」

- **本来的な「将来」**… 「予期」も含めて、そもそもの連関が断ち切られる可能性.
  純粋な「不確実性」が迫ってくること
- 「不安」… 常識まかせにしていた理解の枠組みが全くの「無意味」になってしまい、
  自分の「関心」の根拠のなさに直面する経験
- 「死」… あらゆる「～のため」を断ち切り、無意味にしてしまう可能性

⇒ ではどのように「将来」に
向き合えばよいのか？



ハイデガー『存在と時間』から (3/3)
本来的な時間性における「将来」の問題

“自ら意味を与えなおす” ということ

- 「決断」… 本来的な「将来」を根拠にして、自分の状況に意味を与えなおす
  意味の根拠は**いまこの瞬間の自分自身**にほかならない
- 「取り戻し」… 自分の投げ込まれた事実的な状況や、過去から伝えられたものを
  自分自身のものとして引き受けなおす

問題・限界

- 「死」を本来的な将来の源泉とする ⇒ 「単独化」… 他人との関係は？
- 意味を与えるのは自分自身の決断 ⇒ 「決断主義」… なんでもあり？

⇒ **別の仕方で「本来的な時間性」を展開できないか？**

時間性と語りの関係

- 時間の理解は “語り” のなかで構成される（Cf. P. リクール）
- 語りは人と人との間で交わされ、現実を構成していく

⇒　「本来的な時間性」はどのように語りと関わるか？

- A. Frank (1995) *The wounded storyteller*『傷ついた物語の語り手』
  - <u>病の語り</u>

    - 病によって人はそれまで自分の持っていたストーリーを書き換えねばならなくなる
    - そこでは語りの聞き手の存在が不可欠である

⇒　病を語る／病の語りを理解するとはどういうことか、どのような語りがあるのか

語りの三つのタイプ

- 復帰（回復）の語り restitution narrative
  「昨日私は健康だった。今日私は病気である。けれども明日にはまた健康になるだろう」
  - 病を一時的な逸脱とみなし、安心を確保する。公共的、常識的な語り。
- 混沌の語り chaos narrative
  明確なプロットを持たず、ただ苦しみを述べ立てるような語り
  - 本人、聞き手ともに「どうなるか分からない」という不安や苛立ちに直面する
- 探究の語り quest narrative
  病をきっかけに自らの人生を自分自身で意味づけしなおすような語り
  - 自分が何者であるか、何のために生きるかということを捉え直す。息の長い対話・傾聴が必要

語りの時間的なモード

- “日常的” な語りのモード…　巷談 Gerede（ハイデガー）
  - 物事の意味づけが “常識まかせ” の「現在の関心」に基づく
  - 語りの根拠や責任が曖昧なままに留まる
- “本来的” な語りのモード…　本来的な「将来」に直面する
  - 常識的な語りを問い直し、自分たち自身の語りを探究する
  - 不確実性に共に直面し、語り自体が変容する可能性へ開かれている

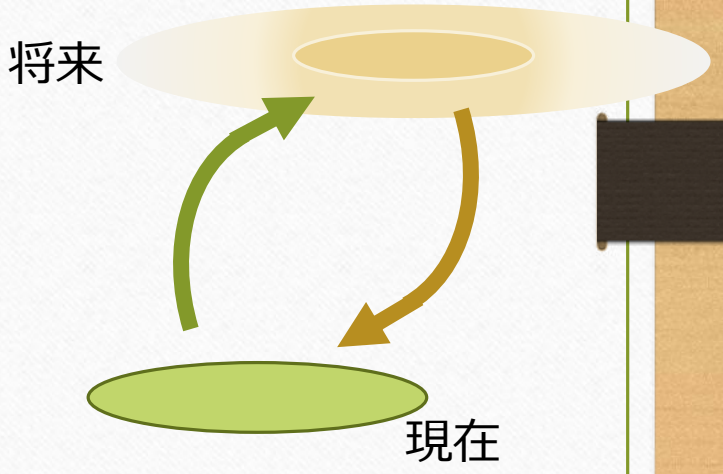
⇒　フューチャー・デザインは、この「本来的な語りのモード」を実現するものなのではないか

「仮想将来世代」の働き

Nakagawa et al. 2017 より

- 現在の関心からの detachment
  「暗黙の前提を問い直す」「日常的・短期的な関心から自らを自由にする」
- 地域のアイデンティティの再発見
  「矢巾のアイデンティティを守る」、自然的・文化的遺産の価値を再認識する

…「自分たち」から離れながら「自分たち」を取り戻す動き



(1) 自分たちで将来像を描く
(2) 将来のほうから現在に意味を与え返す
(3) 現在を「決断」の機として捉え直す

⇒ 将来の方から現在に意味を与えるため、
現在が将来に依存し、将来が現在に依存する
という相互性が生じる

語りのモードの変容

- では「将来像」の根拠は？
  … 「現在の私たち自身が対話し、想像する」ということ
  ⇒　「探究の語り」の共同体（ロールプレイング　⇒「物語」的性格）

- フューチャー・デザインの働きは「現在の私たちを自由にする」という点に認められるだろう
  ただし「自由」とは、将来が意のままになるということではない（Arendt）
  むしろ不確実性を肯定的に受け止めるということ
- そこには「時間にゆだねる」という働きがある
  力の及ばないところへの信頼が必要になる

「語りのモードの変容」という観点から

- 実際に将来世代の人々と対話できるわけではない／どのような将来像を描くべきなのか
  ⇒　現在の我々の語りのモードを「探究の語り」に変容すること
- 語りの共同性への着目
  - 語りは聞き手を必要とする。「**共に**将来像を描く」ということの重要性
  - “自分たちの将来” という意義の確保
- 変容 “可能性” そのものの重要性
  - 将来像は変更されねばならないかもしれない。その不確実性に向き合いうる共同性を構築せねばならない

参考文献

- Heidegger, Martin. *Sein und Zeit*. 19. Aufl. Tübingen: Max Niemeyer Verlag, 2006.（『存在と時間』）
- Frank, Arthur W. *The wounded storyteller: body, illness, and ethics*, 2nd ed., The University of Chicago Press, Chicago and London, 2013 [1995].（鈴木智之訳『傷ついた物語の語り手：身体・病い・倫理』ゆみる出版、2002年）
- NAKAGAWA, Yoshinori; HARA, Keishiro; SAIJO, Tatsuyoshi. Becoming Sympathetic to the Needs of Future Generations: A Phenomenological Study of Participation in Future Design Workshops. *Kochi-Tech, SDES-2017-4*, 2017.
- Fritsch, Matthias. *Taking Turns with the Earth: Phenomenology, Deconstruction, and Intergenerational Justice*. Stanford University Press, Stanford, California, 2018.